

# 子規會誌

越智二良会長を悼む

……一

霽月と為山の風交

足立修平……二

極堂翁を偲ぶ(座談会)

三井瓢百ほか……三

五〇号  
平成三年  
七月

# 例会記 録

## 三月例会（第五七八回）

平成三年三月十九日（火） 正宗寺本堂 出席

二十七名

浦屋薫幹事司会により開会、直ちに講演に入る。

なお、閉会後役員会を開き、四月の総会等について協議。

講演「子規の連句」

芭流朱連句会主宰 鈴木 春山洞

## 定期総会並びに四月例会（第五七九回）

平成三年四月二十九日（日） 子規記念博物館

参加八十名

渡部満泰幹事の司会により開会。さる四月十八日に逝去された越智二良会長（四月十九日本葬、二十一日正宗寺において子規会葬）に黙祷をささげたと、定期総会（平成二年度決算書ならびに同三年度予算案の承認）。終って記念講演。

講演「極堂と子規との友情」

副会長 和田 茂樹

なお、会長の選任は総会で決定すべきところ、五月例会に行なうことが承認された。

また、本例会において「子規会誌」四九号を配布。

## 五月例会（第五八〇回）

平成三年五月十九日（日） 正宗寺本堂

参加二十八名

浦屋薫幹事司会 金村副会長あいさつ。越智二良前会長をはじめ、最近物故の牧野龍夫・二神ヒサ両氏に黙祷をささげたと講演。

講演「子規と恋の句」

大阪成蹊短大教授 和田 克司

終わって、新会長選出のため五人の推薦委員による協議の結果を承認、会長ならびに顧問として左のとおり決定。

会長 和田茂樹

顧問 田中宗坦 金村治三郎

# 越智二良会長を悼む



越智二良会長には、私たちの祈りもむなしく、ご老衰に急性肺炎を併発して、四月十八日十二時四十七分御逝去、十九日午後一時よりご自宅において御葬儀が営まれました。戒名「和春院温良水草居士」。

ついで、二十二日午後一時より、松山子規会葬を正宗寺で執行、来賓多数のご参列を得て（参列者一二〇名）、質素な中にも厳かに会長様をお送りすることができました。

## 式次第

導師入室 正宗寺住職 田中義晃 師

開式の辞

読経

導師引導

式辞

弔辞

金村治三郎

松山市長殿（代読）

朝日新聞社松山支局長 四手井靖彦 殿

愛媛新聞社社長 今井瑠璃男 殿

NHK松山放送局長殿（代読）

愛媛放送株式会社社長 芝正 殿

子規記念博物館長 和田茂樹

子規会東予支部長 山上次郎

弔電代読  
焼香

葬儀委員長 金村治三郎

葬儀副委員長 和田茂樹

喪主 西原政明

遺族・来賓・親族ほか

閉式の辞  
導師退堂  
謝辞

和田茂樹

弔辞

◎ 弔 辞

去る四月十八日、水草越智二良先生の御訃報に接してより、心中に大きな空洞ができてしまったような感じがいたしております。

思いおこせば、先生と親しくおこぼを交したののは、昭和五十三年四月十四日、仮称松山市文化会館第一回建設準備協議会の席上でございます。

先生は敢然として、なんの夾雑物も混じらない正岡子規の博物館を建設するよう主張されました。

若くして操觚界に身を投じ、朝日新聞記者として活躍され、太平洋戦争により言論界が破綻する昭和十八年から故郷松山に隠棲され、子規研究はもとより、風土とは、伝統文化とはという問題を研鑽しつくされた先生の高邁な精神と広い識見からの御意見に私どもは勇気づけられました。

多くは申し上げませんが、仮称松山市文化会館は松山市立子規記念博物館と命名され、今や全国的評価を得、世界からも照会があります。松山市民とその文化のふれあいの場として機能し、早くも十年の歳月を経過いたしました。来るべき二十一世紀に向かって、先生

が私どもに教示されたように、正岡子規を、本市の伝統文化を完璧に引き継ぐことが私の責務であると覚悟しております。

どうかあの温良な眼をもってお見守りください。先生とは彼岸・此岸のお別れでございますが、先生の御高志は、未来永劫引き継がれます。

意を尽くして申し上げることはできませんが、これをもって弔辞とし、在りし日の先生のお姿を偲びつつ、衷心より御冥福をお祈りいたします。

平成三年四月二十二日

松山市長 中村時雄

◎ 弔 辞

生前のお顔も存じ上げない私のようなものが、権威ある松山子規会の会葬で、大先輩越智二良さんの弔辞を読むのは、まことに僭越かつ不遜であることは承知しております。これも朝日新聞の取り持つ何かのご縁でありましょう。

私が朝日新聞記者として仕事をようになったのは、越智さんが退任されて二十一年あと、東京オリンピック開催の年でございます。越智さんが大阪本社の学芸部長の要職につかれていたころは、戦争のさなか、ご苦勞も多かったこととお察しします。こうした先輩たちの築かれた朝日新聞の、揺るぎない基盤の上で仕事のできる今日の私どもは、まことに幸せであると申さねばなりません。

恥ずかしながら、昨年四月当地へ赴任して、初めて大先輩のご健在をお聞きしました。一度親しくお目にかかり、ご指導を賜りたい

と念しながら、果すことができなかつたのは心残りであります。

郷里に帰られてからは、幅広い文化活動に携われましたが、その中で最も力を入られたのは、最後まで会長を務められた子規会でありました。松山の生んだ偉大な俳人正岡子規は、今なお圧倒的な存在感で迫るものがあります。その子規を顕彰しながら自らも健筆をふるい、昭和三十年には、朝日新聞愛媛版に「子規歳時」を一日も欠かさず連載していただきました。越智さんの一世紀にわたる高潔な生涯を支えたのは、文人としての恵まれた才能とともに、若き日に心をとらえたジャーナリズムとアカデミズムへの絶えざる情熱であつたと言えましよう。

もとより浅学非才な身でございますが、残された大きな足跡を汚すことなく、今後も報道の任をまっとうする所存でございます。

安らかに眠りください。

平成三年四月二十二日

朝日新聞松山支局長 四手井 靖彦

◎ 弔 辞

越智二良さん、あなたの御逝去の知らせを受けて、大変淋しく思いました。そして同時に、ひとつの良き時代がまた終わったことを痛感しております。

越智さんのような方から見れば、私らこときはまだまだ弱輩でございます。本来ならば、越智先生と申し上げるべきところでしようが、あえて越智さんと呼びさせていただきます。

と、申しますのは、越智さんは、私ども愛媛新聞の前身でありま

す海南新聞に、大正のはじめから七年間勤められた大先輩だからであります。越智さんの飾らぬ気さくなお人柄には、その大きな業績にもかかわらず、いつまでも「先輩っ」と呼びかけたいところがありました。

越智さんは、海南新聞から朝日新聞に移られ、終戦前の昭和十八年、学芸部長を最後に退職されるまで、三十七年の長きにわたって新聞記者生活を送られました。

長らく、同じ新聞という仕事にたずさわって来られた御縁のせいか、私ども新聞社の者には、ことのほか親身になって接していただいたような気がいたします。もとより温厚篤実なお人柄の越智さんは、だれかれのへだてをおつけになる方ではありませんでしたが、私どもの社の文化部の記者などが北条のお宅にお伺いした時など、誠に温かくお迎えいただいたと聞いております。

昭和十八年、郷里に帰られると同時に松山子規会にお入りになり、昭和三十八年には第三代の会長に推され、会の運営に力を尽くされるかたわら、子規をはじめ、柳原極堂さん、そして松山における漱石の業績などを紹介された功績につきましては、今日御列席の皆様方にお詳しい方ばかりでありますし、また、今朝の私どもの愛媛新聞の学芸欄にも、子規記念博物館の和田茂樹先生からご懇切なる追悼文をいただいておりますので、多くを申し上げます。

ただ、私の印象に残ったことをひとつ。越智さんが海南新聞に入社されます直前の明治四十三年、当時越智さんは松山商業をご卒業になったばかりの二十歳の青年でしたが、松山で「四国文学」と

いう雑誌を創刊されました。一年六か月、二巻六号まで出されました。俳句を主体に随想や小品を盛り込んだ文芸雑誌でしたが、寄稿者には坪内逍遙、島村抱月などそうそうたるメンバーが名を連ねているという素晴らしい雑誌で、日本の地方雑誌の歴史に大きな足跡を残しました。若き日の越智さんの大きな業績だと思います。

みずから多くを語らないかたでしたが、この四国文学編集の思ひ出は、このほか懐かしいものがありになったようでございます。みずからを誇ることなく、静かに一世に及ぶ生涯を閉じられた越智二良さん。あなたの残された多くの御業績、そして時かれた種子は、いま多くの後輩たちによって受け継がれています。そして、多くの種子からひこばえが育って大樹となり、花を咲かせるようお見守り下さい。

心安らかにお休み下さい。心から念じましてお別れの言葉といえます。

平成三年四月二十二日

愛媛新聞社社長 今井 瑠璃男

◎ 弔 辞

本日、越智二良先生の松山子規会会葬にあたり、謹んでご霊前に弔辞を捧げます。

先生、あなたは松山子規会会長として、子規顕彰をはじめさまざまなお仕事を通して、郷土の文化の発展に大きな足跡を残されました。

先生には、三十年以上にわたって「県民の時間」、「愛媛風土記」

など松山放送局の番組にたびたび出演いただくとも、折に触れて他の番組についても具体的なご意見を賜りました。中でも、先生が卒寿を迎えられた昭和五十六年一月から、開局四十周年記念番組として「えひめ教養講座人間・正岡子規」を十五回にわたって放送しましたが、この番組のオープニングで、毎回「子規歳時記」として子規の句を静かな情感を漂わせて語っていたいただき、若い世代にも子規の生き方とその業績への理解を深めることができました。

先生の味わい深い語り口と子規を愛する豊かなお心がこの番組の成果を高め、この年に制定された「地方の時代賞——映像コンクール——」で特別賞を得ることができましたのは、松山放送局にとりましては誠に名誉なことであります。

それから十年、さる三月九日に松山放送局は開局五十周年を迎え、それを記念してドラマ風ドキュメンタリー「子規からの手紙」を送いたしました。

また、四月からは、テレビによる俳句新番組「俳句王国」の放送を始めましたが、先生のご逝去を前に、子規に学ぶ番組が集中したのも、先生のご生前のご指導の賜物と深く感謝申し上げます。

越智二良先生が生涯を通して顕彰されてきました正岡子規の「偉大な精神の鉱脈」は、永遠に人々の心に継承されていくことを、松山放送局は放送を通して支えてまいります。

このことをご報告し、ここに、ご生前のご功績をしのび、心からご冥福をお祈りして、弔辞といたします。

NHK松山放送局長 阿久沢 弘

## ◎ 弔 辞

謹んで越智二良先生の御霊に申し上げます。

まず、ジャーナリストとして、愛媛を代表する文化人として、長年私たちが後輩をお導き下さいましたことに、心からお礼を申し上げますたいと存じます。

越智二良先生、私どもが先生に愛媛放送賞をお贈りした折のくしゃくたるお姿が今も目に浮かびます。あれは昭和五十七年一月、先生が九十一歳のお誕生日を迎えられたばかりの時でございます。ちょうど松山子規会発足四十年、先生の会長ご就任以後二十年という節目でもありました。

あの日、先生はまったくお年を感じさせない若々しい物腰と明晰なお言葉で、正岡子規への深い思いを、情熱をこめて私たちに語って下さいました。

ことに、子規没後二十二年の昭和六年当時、松山にただ一つの子規句碑もなかったという先生のお言葉を、私は今も忘れることができません。

いまや、県内にはおそらく七十基を上まわる子規句碑・歌碑が建てられています。松山には、文学系博物館として世界に冠たる子規記念博物館もあります。まさに隔世の感があります。

これらはすべて、柳原極堂翁をはじめとする先人の足跡を受け継いで子規顕彰の灯を掲げつつけられた先生の情熱によって生まれたものであります。

先生に最後にわが社の画面にご登場いただいたのは、一昨年の糸

瓜忌の番組でした。そして、この春先生が満百歳を迎えられた時、ご長寿とご壮健を社内一同心から喜びあい、記念番組の相談などしていた矢先のこのたびのご訃報でした。すぐれた研究者であり、超人的記録者でもあった先生のお話をもっともっとお聞きし、映像記録にも残しておきたかったと、いまさらのように残念でなりません。古きをたずねて新しきを知る、先生はまさにこの言葉をそのまま実践して一筋の道を歩まれました。ふるさとが生んだ正岡子規の人と文学を探究される情熱を、その生命の灯の消える時まで燃やしつづけられたと伺っております。

越智二良先生、私たちは、先生がジャーナリスト、文人として持ちつづけられた高い志をいつまでも忘れることなく、ふるさとの文化の発展に微力を尽くして参りたいと念願しております。

どうか、いつまでも私たちを見守り、お導き下さいますように。ほんとうに長い間ありがとうございました。謹んでご冥福をお祈りいたします。弔辞とさせていただきます。

平成三年四月二十二日

愛媛放送株式会社社長 芝 正

## ◎ 弔 辞

越智二良先生！

今年一月二十六日、先生には満百歳のお誕生を迎えられました。生涯での大きな節目を無事乗り切られたので、さらにご長命と信じていましたのに、四月十八日急に天上に旅立たれました。かけがえないことに、何ともあらわしような空虚を感じ、思い出がよ

みがえってきます。

先生は明治二十四年松山市唐人町で生れました。松山商業在学中から「文章世界」などへ投稿、募集作文の「博覧会」で入賞し、東京に招待を受け、その記念の写真の中に菊池寛もいたことを後に教えられ、「菊池寛と同時に文壇に出たことになりませうネ」などと述懐されていました。

その当時の小品類を集めて『草愁』と題して、大正二年松山の清平社から出版、田山花袋が二十一編を選び、新編を加えた小品集で、その抒情的な趣が高く評価されました。詩人の田中冬二などは「一番未練の残っている本」と愛着を懐き、「幻の書」として注目されています。

明治四十二年雑誌「四国文学」の編集に塩崎素月と携わりました。本誌では、俳句の地方的特性を主張しました。また、正岡子規の従弟藤野古白特集を企画し、当時文壇の第一人者坪内逍遙に原稿を依頼、逍遙はこれに応えて原稿を送ってきました。ともに地方文学としては独自性を発揮し、先生の晩年の方向の母胎になった感じがします。当時から川柳も俳句も嗜まれていたのです。

大正元年海南新聞に入社し、大正七年朝日新聞大阪本社へ、昭和十八年戦火激しさを加え、健康上の理由で、学芸部長を最後に、三十七年の記者生活に終止符を打ち退社、松山に帰られました。

偶々、柳原極堂は子規顕彰を提唱し、昭和十八年一月「松山子規会」が創設されました。村上霽月・岩崎風雨・小川尚義・三由淡紅や影浦稚桃など、子規と親しかった人々が毎月集まって、話題はも

りあがってゆきました。

先生は、第三回から出席し、談話を綿密にメモされました。これが先生に課せられた天命だったとも思われます。明治の松山の風物や、その中で育っていった人物の姿を、正岡子規を、より明確に把握されました。

昭和三十年には、朝日新聞愛媛版に、三百六十五日子規の俳句を毎日掲げ、

今年また花散る四月十二日

の句には、藤野古白の自殺した日なので、その人物を点描するなど、その情景を簡潔に紹介されました。翌年二月朝日新聞松山支局から『子規歳時』として出版するにあたり、九十歳になった極堂は、年頭最大の喜びと絶賛し、自分の所持していた『子規全集』を贈りました。極堂は念願の子規顕彰について、二十五歳年少の先生に万事頼むとの思いからでしょうが、安心されて翌年長逝されました。

子規会長は、初代菅菊太郎、二代景浦稚桃と継がれましたが、昭和三十八年第三代会長に先生は推されました。暫く代理でと話されていました。その清廉潔白で、研究ご熱心で謙虚なお人柄に会員一同心服して、今日にいたったのです。

その研究の成果は、多くの著書となっています。三十七年の『愛媛の句碑歌碑』、四十年には『井上正夫』があり、四十七年写真師の風戸始さんとの共著『子規と松山』、翌年『虚子のふるさと』は、子規や虚子の文学遺跡や風物を撮影し、先生の説明文を添え、本を開くと一覽できるように編集、今では見られぬ景色もあり、貴重な

楽しい本です。

『五十年随筆』『たれゆえ草』出版、北条にお住いなので、朝夕眺める腰折山、その山麓に咲くエヒメアヤメを、八十歳になって観にゆかれ、その本名のタレユエソウに、誰のために咲く花という気持をこめられていると思われまふ。さりげない草花にそそがれる愛情は、多くの思い出深い人々まで浮き彫りにされています。青春の詩的な情感が沈静して、晩年の随筆は淡々として滋味深いものがあります。五十六年『子規歳時』も新訂版として再版、版を重ねて四版に達しました。

県史・市史をはじめ、新聞や放送の随筆・随想類、若き日の小品類、とくに『草愁』など、是非出版させて頂きたいと思つています。その業績をたたえ、県教育文化賞・勲五等双光旭日章・愛媛新聞賞・愛媛放送賞などを受賞されました。

五十六年松山市立子規記念博物館創設にあたり、松山市として最も貴重な独自の博物館をと主張され、それが実現しました。

明治から大正・昭和・平成へと、一世紀余にわたり、子規顕彰に、地方文化振興に尽料されたご功績ははかりしれないものがあります。先生の高邁なご卓見の継承は容易ではありません。二十一世紀へむけて、一切が進められている今日、松山は、全国に先駆けて国際俳句の道を開き、愛媛文化の世界への発信地となってきました。先生のご遺志を、さらに進展させ、お応えしうるようつとめてゆきたいと思ひます。

越智二良先生ノ

先生は、子規居士と、この世のかけはしとして、松山を、日本を、世界の趨勢を、今安らかに語られていることでしょう。

先生のご冥福をお祈りするとともに、いつまでも松山子規会をお見守り下さるようお願い申し上げます。 合 掌

平成三年四月二十二日

松山子規会 副会長

松山市立子規記念博物館長

和田茂樹

◎ 弔 辞

つつしんで、松山子規会会長越智二良先生の御霊前に、哀悼のまことをささげます。

この春、先生の百寿のお祝いに、何かを書いてお届けするようにとのことで、二月十九日の子規会の席上、私はこんな歌を短冊にかいてさし上げました。それは

越智会長の百寿尊し 子規<sup>おし</sup>大人の

倍の倍の倍より ずーっとと祈る

という歌です。

百寿のおめでたい先生ではあるけれど、お一人の御日常はお淋しからうと存し、わざとおどけてこんな歌をさし上げたのです。あれからふた月ばかりで、こんなに思いがけないお別れをしなければならなくなりました。

おだやかで玉のように玲瓏としたお人からの会長さんのことですから、こんな失礼な歌でも、笑ってお許し下さるのではないかと、

心淋しく思い返しています。

松山子規会叢書の『子規遺芳』によりますと、会長さんがわれわれの子規会に出席されたのは、実に、昭和十八年三月十九日の第三回例会の時からとのことで、これは四十八年も前のこととなります。それ以来、われわれの会のためにひたすらお尽くし下さったのですから、先生は、本当にこの会の肝心要のような、かけがえのない尊いお方で、我々の心の寄り所であったのです。今日の突然のお別れが、残念で残念でたまりません。

いつでしたか、子規会の席上で、私は先生からこんな宿題を頂きました。

それは、明治末期、河原碧梧桐が『三千里』の全国大旅行で四国の地を<sup>巡</sup>った時、そこで出会った当時の俳人たちのことを調べてみてはどうですか、というテーマです。この古くしてフレッシュなテーマを思いつかれた会長さんの若さに心うたれましたが、それがそのままになっていて、まことに申し訳なく存しています。

5つの日か、このことで何かまとめられたらと存しています。

先生は、ある大手の日記出版社の日記の九月十九日のところに、「子規忌」という記事がないのを残念に思うということを漏らされたことがあります。こんな発想は、いつも子規さんのことを胸にた

たみこまれていないと思ひ浮かばないことだと思ひます。そんなことをおっしゃる先生のお気持がまことに尊いことと、今にその日のことを思い出しています。

一事が万事、先生のお心の隅々までが、いつも子規さんで一杯だ

つたと、今も信じています。

子規さんが生きておられたら、今年で満百二十四歳、そして、越智会長さんは満百歳、今ごろ、先生は、二十四歳ちがいの子規さんと、天国でたのしく話の花を咲かせていらっしやることでしょう。記憶力抜群の先生のことですから、お話のたねはつきからつきへと尽きることはありませんまい。

どうか、会長さん、子規さんや昔の「ホトトギス」ゆかりの方々と、最近のニュースなどを、ゆっくりとお話しになって下さい。

私は、この世で先生と出会えたことを何よりの宝として、又何よりの幸せとして、これから更に意味ある日々を生きつづけたいと存じます。

ここに、会長さんのありし日々を偲び、御冥福を心からお祈りして、今日の日の私のことばといたします。会長さんさよりなら。

平成三年四月二十二日

松山子規会 森 元四郎

◎ 甲 辞

梅咲くも散るをおしむも一人言

先生のこの御銘句は、先生のお便りを頂きました時、下さいました。梅咲くも散るをおしむも一人言

親身になってお世話下さいます方を得て、先生の日々は、淋しさも悲しさも無く、十七文字の中にもいつも花を詠じ、月を吟ずるの日々でございました。御逝去の時、和田茂樹副会長様のテレビからのお話の様に、記憶力抜群なのは驚きの外なく、色々のことをお

尋ね致しましたが、年月日まで、御本も見ずにお教え下さいました。いつも、この方が白寿か百歳かと疑うことが度々でございました。

その先生に、今日は子規会に縁の深い正宗寺でお別れしなければなりません。

先生、私は釣鐘造りの名人の御本を読んだことがございます。その名人は、鐘に撞木が打込まれた時、ゴンゴンという鐘の音はもちろんのこと、その後に関り無く続く余韻こそ鐘造りの命であるぞと書かれていました。先生に頂きましたお言葉やお便りは、撞木を打込まれた尊い音でございました。

これからは、日々、先生の想い出にふけり、いついつまでも続く余韻の尊さを頂きます。

先生は、これからは、お一人暮らしではなく、御令室様をはじめ、子規居士、極堂翁や諸先生の遊ぶ極楽の花園に、楽しい日々をお過ごし下さいませ。

先生、さようなら、さようなら。

霊界を偲べば頬に時雨降る 瓢 百

極堂会副会長 三井 清

◎ 弔 辞

謹んで越智二良先生のご霊前にお別れのご挨拶を申し上げます。

先生に私のことを知って頂いたのは、父素月の遺稿集『葉桜』を出した昭和五十三年のことでした。

その後、昭和五十五年に『不器男全句集』を出しました時、これの子規会叢書に加えて頂き、是非子規会で話をせよとのことと、「

葉桜と不器男」と題してお話をいたしました。

親しくお目にかかりお話をしましたのはその時が最初であったように思います。それ以来、何かとお目に留めて頂き、お導き下さいました。

先生と私の父は、明治四十二、三年頃、「四国文学」という文芸雑誌を共に編集発行していたとでございます。このことを知って以来、私にとっては先生が慈父の如く感ぜられ、一層の親しさを覚えるようになりました。

先生も何かにつけて昔のことを思い出され、度々お手紙など下さいました。私もいい気になって勝手なことをお尋ねしたこともございました。先生は昔のことを実によく覚えておられ、こと細かくお教え下さいました。そのことは私にとって何かと励みになりました。先生の残されたご功績は、私などから申し上げるべきものではありませんが、松山子規会会長として子規顕彰に献身的な努力をせられ、新しい世代のために道を開いて来られました。子規の名は、今や日本全国はいうに及ばず、全世界にまで及んでおります。

去る三月十四日のお昼前だったと思いますが、突然先生からお電話を頂きました。何のお話かと伺っていますが、あなたが「子規博だより」に「四国文学」のことを書いていたが、私が最終号に書いた「言っておきたいこと」のノートがあったので、子規博の宝来さんに渡しておいたから、何かの機会に見て下さい……と言われ、約二十分近くも当時のいろいろなお話をなさいました。

一か月余り前のことでしたが、まだまだ長生きして頂けるものと

ばかり思っておりました。しかし、これが最後のお別れのお声となつてしまいました。

今になって考えますと、先生は、今年になってから、子規会へ多額のご寄付をなさつたり、何かと旅立ちのご用意をしておられたように思われてなりません。

満百歳という天寿は、並の者にはなかなか真似のできることでありませんが、先生のようなお方はもう少し長く生きていて頂きたかつたと思います。

残念なことです。お別れしなければなりません。

先生、どうかやすらかにやすみ下さい。

桜散って思い出多き正宗寺

平成三年四月二十二日

松山子規会会員 塩崎 月穂

甲 句

今落ちし椿の赤き色拾ふ  
惜しまれて百華の花野逝きませる  
子規居士のそばへ旅立つ牡丹かな  
城はるか一鳥啼いて雲に入る  
糸瓜苗提げて発たれぬ子規許へ  
閻伽の水子規と語られいよすみれ

里風 梨栄 錦水 山陰 糸舟 春汀

百歳の天寿全し桐の花  
名桜の散る百歳の春惜しむ  
安らげく新樹の黄泉路ゆかれかし  
悲しみの色を重ねて牡丹散る  
師は星にわたしは病みて春深し  
巨き灯の消えたる春の寒さかな  
雲に入る老鶯声を尽しけり  
梅に寿ぎ桜に散りし百寿翁  
梅咲きてももとせを寿ぎ山桜散りしく  
黄泉路翁逝きけり

極光 つや女 うめ女 好乃 ヒサ 孝太郎 緑葉 通敏 同

遺稿集刊行予告

子規こそわがいのち

——越智二良随筆集——

「草愁」など

——越智二良創作集——

しのぶ草

——亡き妻を偲ぶうた——

# 霽月と為山の風交

足立修平

## 献酬の句 (資料)

為山と霽月の交遊は俳句で始まった。

一、明治二十七年四月十九日、為山より霽月あて。

行春やとりちらしたる絵具皿

木曾の奥水絵の如し閑古鳥

二、(年不明)牛伴(為山)より霽月あて。

駿河路の六月寒し心太とろろん

一筋の路もありけり紅いちご

川狩や優しきすねに水猛る

六月や鳥啼居る石の上

赤馬のたけりたてたる暑さ哉

芥子(の)花豆腐は黒き在所哉

大臼の切り捨て、あり雲の峰

時鳥はととすその山高く水長し

蚊柱の奥や伽藍の二百年

日永し大仏の影二十丈

大仏の後に咲きぬ遅桜

花の下に鯛の骨嚙む乞食哉

鉞突いて見て居る山や春暮るゝ

五月雨の中を牛行き馬戻る

五月雨に蚤のみが伏屋の浮きもせず

豊のいぶし立てたる蚊かや遣哉

桜鯛奴が鎗にぶら下る

右咄とつの作御批評下され度候

五月二日

霽月君 机下

牛伴 拜

三、つづいて(年月日不明)、牛伴より霽月あて。

山の名も水の名も無し散る桜

大仏の雫ボチボチ春の雨

手枕に花散る里のゆめ寒し

手長嶋足長嶋の日永哉

春の夕せんか潺湲として水流る

大仏の鼻から出たり蛇ま一つ

無人嶋をたゝ陽炎やうえんのたち上る

先日御話の肖像、出京前に落成致置かん、如何にや。

霽月君 机下

牛 伴 拜

四、五月二十六日には、霽月の祖母堂の肖像画制作の進捗せる事を告げ、併せて俳諧の事に及んでいる。

閑古鳥汝が姿絵にかゝん

閑古鳥われに俳諧の心あり

菱の花古城の雨晴れ渡る

鬼婆この軒や瓢の花盛り

粟蒔の笠脱いだれば和尚哉

粟の穂に街道狭き信濃哉

右

牛 伴

為山と霽月は書筆のやりとりだけでなく、為山在松中は、時々往き来して画業を談じ、俳諧を詠し合ひ、時には鶉鷺をたたかわしている。霽月流に言えは詩酒<sup>ししゅう</sup>徹<sup>てつ</sup>の状态であった。

五、明治二十七年十月二十五日、牛伴より霽月あて

先月御案内を忝りし、その節ハ少々差支あり、参堂の事今に相極

不申、其内には有志二三子と御訪問可仕候。御高吟汚墨に及び候。

多口妙想の人を驚かすあるは敬服の至に御座候。

掘端や夜寒の燈只一つ

秋寒し鳥<sup>か</sup>賊<sup>ぞく</sup>の眼の鳶<sup>とび</sup>鴉

秋のくれ仏の腕<sup>かた</sup>もげにける

歌人よ萩にぬれ行我を詠め

五歩に薄十歩の萩の月を踏む

兄弟が豆腐煮て喰ふ秋のくれ

白波の芒に添ふて走るかな

牛 伴 拜

霽月光風大兄 坐下

此節海南新聞へ掲出致すより相成候に付、玉吟折々御寄送成下され度候。

六、明治二十七年十月二十五日、牛伴より霽月あて。

高句一々敬服の外なし。就中、

雨去て江ハ暮れんとす行々子

葉桜の奥より花の流れけり

行春を源氏の君の仮寝哉

菜の花や牛の背が行く笠が行く

青柳の糸より青し春の雨

若楓御園の春は行にけり

蝶々の雨しとゝなるわか葉かな

拙句左に

傀儡師まづ櫓門を見上げたり

帰るさを瀬田の長橋つばくらめ

(七) 高評

霽月雅兄

小生の上京ハ今月半過なるべし

七、明治二十七年十月二十九日、牛伴より霽月あて(為山評)。

(霽月作、牛伴判)

○霧雨の妙義を上る行者哉

秋寒し崩れのこりし梅門

○ぬれ筵干すや磯屋の秋の風

○岨蔭の狭畑は何秋の山

秋の雨三笠の山をぬらしけり

○茸狩の戻りや小野の夕月夜

○○夕月や鹿のまつはる巫女が袖

○秋雨や浮世を偲ぶ筑紫琴

○○秋の雲諏訪の湖水に沈みけり

○秋雨や黒き魚浮く蝦夷の海

○秋の夜の灯影に刻む百羅漢

○○○月落て夜を深草の砧哉

辞麗

○○○渡りける蝦夷の夕雲棚引ぬ

○○曙やぬれし紅葉の二十日月

○鳥羽道や夜寒の二十三夜月

○○山猿の月啼き落す夜寒かな

○武蔵野や鴨立つ草の三日の月

大原女の大原にかへる秋の暮

○秋風や芦の干潟の捨小舟

秋雨を木曾の新そば打たせけり

○寺町やうしろの山の鹿の声

○末枯の河に率塔婆二三本

古寺の門より内も花野哉

白露や荒寺の瓦処々

○行秋をあちら向たる法師哉

萩桔梗乞食の娘嫁入なり

○松杉の露に明たり麓寺

憶故人

明月やなくてぞ人の意はるゝ

明月や闇の現のまさりける

更けのこる按摩の笛の時雨けり

○初冬の橋わたりけり滑川

○初冬や窓の障子の灸ばかり

○初雪や若き女の市女笠

○朝時雨高繩走る肴売

○朝時雨立寄る不破の関もなし

○灯のともる堅田の御堂時雨けり

○夕暮の矢瀬の白帆時雨けり

○夕時雨彦根の城に陽のあたる

○山寺の裏山時雨猿啼く

右野作、御評可被下候。

牛伴様

妄評多罪(牛伴)

八、明治二十七年十一月二十三日、為山(出澳町下村方二神純孝)

より齋月あて。

石段を八丁のぼる紅葉哉(齋月句)

草紅葉散るや葛西の大根畑

暮近し西行谷の薄紅葉

(右の三句を取り出し) 御高吟殊に感服仕り候(と評して、その各々の句に略画を描いている)。

九、明治二十七年十一月二十四日、為山(下村方二神純孝)より霽月あて。

(霽月の祖母の肖像画の遅れを詫び、霽月の句に評点をつけて)

御高吟の内

○柴の戸を出ずれば<sup>た</sup>蓼の小径哉

○撞く鐘に冷たき冬の日脚かな

縦横に人時雨けるかれ野哉

狐啼いて古里遠き霜夜かな

満山の紅葉冷し朝の月

棧の下をのぞけば冬の月

御車に嵯峨の時雨の霏哉

妄評多罪

下村拜

十一月二十四日

霽月 大兄

(このあと、重ねて肖像画の延滞を詫び)

行年や半ば描きし人の顔

(という句を付けている)。

明治二十八年度中に霽月の手に入った為山の手紙は十通、いずれ

も二、三十句の俳句を添えてあり、互いに批評し合うことを常とした。時には、これはと思われる賞讃の評点を呈することもあれば、時によっては、遠慮会釈のない酷評を頂きながらも、俳句の修練に努めたようである。

一〇、(明治二十八年)、牛伴より霽月あて。

初風の近江へ越る夕日哉 (霽月)

万歳の歳々人の似たる哉

いづれも妙といふ外なし。鶯の句最も同情を表す。初風の意は古

句にあらざるか。

初鴉蝦夷に葛屋の並びたり (霽月)

青柳や客待車二三<sup>ひつき</sup>輻

夜の雪叡山の鐘わたる哉

都出て梅遠近の春辺哉

わか草や内待か袂女御の袖

佳句三吟の値あり。前句に比すればやゝ平に過ぎざるか。

妄評多罪。

別紙御評を乞ふ 青々居主人

野 句

白梅に杉垣低き川辺かな

梅柳京の辻々明けわたる

夕霞夕山桜かねが鳴る

起上る乞食の上の柳哉

若草や牛追ひ上る夕堤

朧月都は花の夜なりける

水とくく白梅の奥家ありや

五六人赤ゲットウに春寒く

人もなし春風わたる十二楼

柳とは京のあしたの名なるべし

川上や小舟に餘る春の人

病癒えて春は日暮根岸哉

蛤の二つは重し君が袖

立ち寄れば古寺は花のゆりべ哉

青柳の中の川筋またれけり

春風や木にぶら下る馬の沓

叱正

牛伴

霽月様

一一 明治二十八年、二神純孝(為山)より霽月あて

春如海時に吟興の迸るなからんや。瓦全玉碎両得ず遺憾……(復

籍問題での悩みか)。

(霽月句、純孝判)

古草や幾筋見ゆる犬の道

〇〇山里のはるは来にけり楨柱

土筆むかふの岸に五六本

〇〇葉ひびくやちちと啼鳥何のとり

〇〇君が手にこぼるゝすゞ菜すゞしろや

恋猫の姿おそろし屋根の月

〇唐人の暁寒し梅の花

谷のあらし梅や流るゝ香や伝ふ

〇君や嘸あ梅の花衣薫ころも

若草やゆく道切れし溜水

〇大原や何の小草にのこる雪

しら梅に杉垣低き構哉

〇梅か香や一町のほる石の段

梅が香の今年も庵に来る春ぞ

傀儡師六条通日は落ちぬ

戸をいづる主老ひたりうめの花

鐘楼の梯子朽ちたり梅の花

一二 明治二十八年六月十日、出漕町下村純孝より霽月あて。

度々芳墨を忝。時に俗事紛々空しく断音。句亦成らず、画亦然り。

余有故愈復帰することゝなれり。

時鳥妻子珍宝捨つる身ぞ

冬村は小生の別号にて霜村よりとれり。

このたび霽月兄の女兒を挙げられしを祝して、

一面影や雨のあしたの杜若かきつばた

同狂句

富士額母御に似たる初茄子

野句

空屋処々大官町の桐の花

病む人の枕辺近きわか葉哉

酔醒の小便長しほととぎす  
わか竹や魚提げて行小女郎  
君云はずわれ語らず春のゆふべ哉  
うぶ声は女なるかも麦の秋

感 吟

僧正が浅黄ころもの四十日哉 (霽月)

小家三家卯の花咲て月夜哉

日たゞ何を腰折山のわらふやら

小冠者来て一本つみぬつゝみ草

雨をぼつ焼蛤の煙哉

四月三角山田の小田の青みけり

麦黄ばむ中に湖水の湛えけり

金春の鼓も遠し宵の春

薫るなり初谷川の春の風

水無月の京となりけり瓜茄子

五月雨のからす鳴なり妙心寺

昼顔や岸の蛇籠の崩れかけ

小生上京は四、五日を経されば慥に決らず。

霽 月 様

人世不如意嗚呼穢土

ほととぎす身をかくすべき山もなし

虫はみし仏生れぬ比久尼寺

尼寺のかきのくちなし咲きにけり

山里も袷説しく成にけり  
夕立を集めて流す九段坂

正風公員の句に

夕立の降り上りけり五条坂

とあり。

貴君には痔にて御困却の由。此には必治の良薬あり、服用されんことをすゝむ。

時鳥おこりをふるう男あり

沸きにける薬の鍋や時鳥

一三 明治二十八年八月十四日、為山より霽月あて。

小生四、五日中に弥々上京、十月末頃迄には帰松。

あちさみのわづかに浅黄月夜哉

真黒な女首出す木槿かな

舟底の泥にひつゝいて秋ぞ行

白露や踏細まりて家二軒

家一つ夏野の原の真中や

針箱の中より出たり唐辛子

秋の月人無き舟の流れけり

夕顔のそれにも女一人かな

夕波に漂ふ女扇哉

山僧の筆洗ひたる清水哉

むらさきに暮行雲の峯遠し

朝白(顔)の蕾一とつとなりけり

朝白の二葉うれしき寢覚哉

蜻蛉や小磯つゝきの砂畑

一四 明治二十八年八月、為山より霽月あて。

時鳥十五景一読三歎、冬村先生筆を投じて啞然たり、就中

時鳥紙すき小屋の昼の雨

(霽月)

朱雀野の五月晴れたり日傘

夕顔やふらりふらりと糸瓜哉

都出て鳥羽深草の五月哉 平常お得意の手段。

木曾川を横へ這入って閑古鳥

横へ這入っての語意妙ならず。

夕立や草山走る白兔

夜更て浜名の湖の富士青し 余尤愛其新。

野吟

(為山)

田の中に糸瓜花咲く空家哉

炎天の大路に軋る車哉

夕涼美人蓮歩を運ぶこと遅し

閑古鳥何か喰度り成にけり

虎の子の二匹生れて土用哉

ほとゝぎす村は十戸の月夜かな

二三声君を待つ間のほとゝぎす

ひる顔や夕べに咲てあはれなり

雨や風や梅の実落る藪の中

一五 明治二十八年八月二十三日、為山より霽月あて。  
小生いよいよ出発……(為山東上)。

伊予の秋船待つ人の二三

かき残す秋の扇の画は何ぞ

見返れば秋立ち初めぬ城の松

初嵐船馳走すること三百里

初秋の別れに何を語らんか

名酒を恵まれたるに

酒三杯古里の秋を立出づる

一六 八月三十一日、本郷真砂町下村純孝より霽月あて。

去廿八日無事着京仕候。京都にて、

京の夕喧嘩の中に柳散る

紅筆に朝白(顔)画く女哉

葉がくれに白朝白の一つ哉

朝白のかきに取つく小蛇哉

古辻に秋立ついざり車哉

行く人の傘に落ちたる一葉哉

一七 明治二十八年九月二十九日、真砂町内藤方下村より霽月あて。  
暴木霽月多罪

暴木霽月多罪

(拙)妹なくて鬼灯赤きかきね哉

(以)下)かさかさ馬の物喰ふ夜寒哉

船の灯の遠ざかりけり雁の声

秋の風菟藪も来ざりけり

柿の木に柿干す谷の小家哉

寂寞境中有凄麗。

枯れて立つ鬼灯赤し畑のへり。

詩思たるを失はずといへど極めて平々たるを失はず。

あしはなきともあわれ深し。

佳調佳景。一村は柿の林の夕日かな。

稻妻や仏眼活と立ち玉ふ

大仏の鼻凍りけり稻妻

草屋根に孤戯る月夜哉

鳥羽僧正の筆をからずや。

山川や田は三反の落水

小山田の峰よりひびく落水。

虫喰はぬほうづきまなし谷の家 我背戸は青鬼灯の野分哉

海遠く雁鳴きわたる雨夜哉

雄渾の質ありて陳腐を憾む。

町中や何に人寄る秋の暮

好句と雖陳腐。

兩十日垣の糸瓜の物憂かり

村居此感あり。

ばせをばらはら粥冷え山僧未た起きす 奇を以て勝る。

何の木ぞ切崩されて紅葉する 長堤の柞の紅葉夕日さす。

秋の空山鳩高くとび去りし 是も好句。

### その後の交遊と画論

為山は、多くの画家がそうであるように各地を旅している。京阪地方はもとより、伊豆・北海道・仙台・霞ヶ浦・和歌山、房総の流山、故郷の松山・西条・今治・三島等々へ画材を求め、又一方では得意とする肖像画の需要を求めて。

七月五日の霽月宛の手紙は次のようにしたためてある。

拜復、近頃はなかなか御多忙のよし。承者近頃ハ銀行を興され、傍ら例の織物など猪頭(流山)の計に熟せられ候趣羨望ニ候。俳句、さし絵いづもぞんざいなものばかり、知己に背くこと多し。

小生今年はいよいよ当地(流山)を引上げ、何処かへまわり度愚考中に御座候。不日或はお向ひの呉の方へ出掛るやも知れず、何れ

の地にしても御知人あらば可然御紹介願ひ度きものに候。肖像など拵へそりな人、周旋してくれそりな人へ。呵々。いつぞやお話の光風霽月の画ハ、それなりに相成居り候へ共、此秋頃には帰郷可致、その節には書てお目に懸け申すべく候。

と、「御地には肖像画の希望なきにや、可成ハ御周旋の程偏ニ希上候。」と要請して来ている。是に応じたか、松山の周喜三郎氏（霽月の親戚）、重見番五郎氏らが応募している。

また、独り旅のわびしさをうたつては、

尻のあたり涼しと見ればほころびよ

飯櫃も見えて裏屋の青簾

かきよこす一人二人や白うちわ

甘酒を吹きさましてや尻に分つ

涼しさや五尺の菖蒲荷ひ行く

と独居の孤独のわびしさをかこつてゐる。

明治三十六年二月の手紙には、

さて、玉句に就て批評せよとの御申越なれと、近来ハ兎角水句界とは遠ざかりがちにて、批評などとても出来たわけのものに御座なく候へ共、いささかの愚見書添おき申候。

と申して来ている。

明治三十七年一月三十日付けの手紙では、「五題句集の投句延引申訳無之、特に御差支なくば今兩三日御猶豫願上御」と申し出てゐるが、主な要件は左の子規居士墓標のことであつた。

○子規居士墓標凶案ハ、一昨夜一宿兄へ御渡申置候へハ、其内

御高覧を可經、尚御意見も御座候はゞ御漏し被下度。

○子規墓標相談会出席ハ今四、五日中ハ差支申候。若し御開会の節ハ御模様御きかせ被下候はゞ難有存候。都合により参堂とさまれば前日に申上置べく候。

と、子規墓標建立に協力を申し出ている。

明治三十九年夏には、東予地方滞在中に左の書簡を寄せている。

(今治) 当地ハ松山より万事ハイカラとの御話に候へ共、一向左様にも

感ぜず候。当地俳人も六、七名は有之候へ共、極幼稚、お話にならず、まだ波止浜の方が頼母しく候。御漫遊御待受候。

麦秋や橘の寄進に我もつく

百本の梅の主やむめを干す

山寺の飯くさる夜や子規

歌善くす小野の醜女や時鳥

空を抜く塔の黒さよ子規

同年十月六日付けの書簡も今治からのもので、

(前略) 先達碧梧桐氏滞松の際ハ俳況定めて打振ひしこと、被察候。御近作ちとお漏し被下度。

野吟「梅」

梅に遠く柳に近き酒屋かな

梅処梅の木細工霽ぎけり

白梅や崖を抱へて庭作り

古道や残る小家の梅の花

梅に名の豆腐屋料理流行りけり

白梅や野に突出たる一ト構へ

百姓や蒜作る梅のもと

行く我に梅の里人恭し

伝へたる無名の軸や梅の花

白梅や藪のあなたたの施薬院

老て詩に遊ぶ富貴やむめの花

師の病訪はまく梅を剪りにけり

われに続く人の二三や奥の梅

乞 斧正

為山

霽月様

霽月と為山との関りは濃密さを保ち続け、取り交わされる手紙の話題も、時には美術あり、又俳句で彩られることも多くなつて来れば、時には俗事が登場することもある。そのうちの幾つかを雅俗と混せて取り上げてみよう。

鳴雪翁埋髻塔建立についで

○鳴雪翁埋髻塔に就ては色々御高慮を煩はし感謝の外無之、何分よろしくお願ひいたします。お示しの方法によれば随分立派なもの、誰も異議申すものはなかるべし。さて、肖像に就いては、従兄弟の關係上からでも是非小生がやらなければならぬ義務あり、何ぞ他の若輩どものなまくら腕にまつ要あらんやだ。兄等意を安んじ玉はんことを乞ふ。然しだ、翁生前に或るふとした機会に写しおきしものは、実は極疎且小なるものであるが、それによるの外なく、元よ

り完全を期するは至難とするところではあるものの、小生の筆になく出せるものであると、我も人も只々あきれ居るのみに候。然し、一般の画家がそれ程までに無遠慮に攻撃せざるは、出品鑑査の際に於る影響を恐れてなり。意気地なきこと悲しけれ。

○(一)次いで又一書、前便申上度事あり左に」として)。  
昭和二年十二月十七日)

眼球は円錐状に彫る事。碑の裏面へでも建立の年月並に彫刻者の名前も入れて然るべきか。先日画稿御送り申上候翌日、珍しく内藤未亡人及嫁御、孫女初子(五才)三人連れにて来宅、早速下絵を取出し見せ候処、祖母殿が孫女に「是は誰か」と尋ね候所、直ちに「初子のお祖父さん」と答え候。小児の眼に判断つきしことよつて、ます肖て居るといふ事又は及第致し候わけにて安堵致したる事にて候。

### ○画論

復、観楓之好時節を以て御旅行嘔快心の事多かるべしと羨望に候。近頃句作に於ては御苦心の由御同感に候。今は文学、美術を通じて迷ひの道に彷徨する世とこそ存候へ。

本年の文展余り振ひ不申。小生はある理由の許に出品不利益と信じ候に付、前より文展の為には敢て筆を執らぬ覚悟に御座候。

不折の評判よろしからざるは当初よりの事にて、今回の巨人の跡など不相変駄作と申す他無之、第一組立と云ひ、色と云ひ、なつて居り申さず候。いつかも漱石が「不折は色盲」だとして冷評を加えしと聞き及び候。彼は色などに於ては先天的駄目な人間に候。背景

など活動写真のペンキ絵にも若かず、あれでよくもはずかしくもなく出せるものであると、我も人も只々あきれ居るのみに候。然し、一般の画家がそれ程までに無遠慮に攻撃せざるは、出品鑑査の際に於る影響を恐れてなり。意気地なきこと悲しけれ。

お説の男性的美云々もさることながら、それは或る程度まで「もの」になつての上の事にて、仮令ハ俳句で申せば十七字調の体をなさず、且「テニハ」などあまりの間違ひあつては、如何に豪壮又は審美の情を歌つたといふ事が想像されても、少しも俳句とは認めなかるべく、彼の作も畢竟それ位の程度のものにて、若しも鑑査を経べきものとすれば、彼の作は無論落第物になるは誰も云ふ事に候。

色と申す事も、きたなきは敢て妨げず候へども、きたなきが面白いといふ場合、即ち画家が意識してさういふ風に作り上げた場合には、彼が如きは色をこなすこと非常に下等で、且、ブラッシュの使ひ方に極めて拙劣の結果、むさくろしくなつたといふ事に帰着するのみに、お話になつたものでなし。尤も、不折の作のみにあらず。黒田のイチゴの絵も大したものではなく、黒田の名前だけに兎角世人が善解するといふまでに候。又、二等賞に入りし「六月」の日などもいゝかげんものにて、前景のバラの叢といひ、海空などの関係甚だ不自然なものにて、殊更に持つて行つてくつつけたといふ痕跡明々なれど、賞に入る資格は到底我等の解するに苦しむ所に候。

さて、斯様に云ひこなしては、只々悪罵を逞しくするとのみに御取相成やも知れず候へども、洗ひざらひ正直のところが如斯申より外に意義を見出さず候。然し、従前より追々進歩する形跡は慥かに

認め申し候。従前のやり方は只物を写生するといふまでに止まり居候へども、今日は多少「ある感じ」を表現することに注意致す事の傾向を持ち候点は喜ぶべきこと、信じ申し候。

近頃は又印象派のゴーガンなどの風を真似て、一種不可思議な描き方を試み得意がっているものが若し連中に有之候へども、實際の力あつてやるものなら兎に角、只徒らに似顔描の愚に終るのみにて、余り新奇新奇と先走りするは、所謂猪武者の勇あるは賞すべきなれど、我等は敢て取らざる所に候。

伊予日は毎日見居り候処、御地方俳人の句作を折々一見致し候。

例の新傾向とやらの風にて、我等は一読暗記し得るもの殆んど稀に候。或は句作者自身に於ても然るならんかと思はれ候。尤も、長篇の詩或は小説の如きもの皆々一読暗誦し得べきものにはなけれど、一読の上は必ず何ものか頭の中に残るものあり。然るに、それよりも十倍、百倍簡單なる俳句に於て頭に残るものなくて、このものは果して賞すべきものなるや否や、我等は今に至つて大いに疑ひ感ふ所に御座候。之は甚淺薄なる理由に候へども、この淺薄なる理由さえも解決に困り申し候。兄のお考え如何にや。

虚子の句については、先ず従前の通りのものにて、矢張虚子と申す他無之候。小生最近当地と東京とかけ持的に往来致し居り候へど、近日いよいよ当地を引ひ、当分東京本郷区台町二七鳳明館内へ宿り可申、然し、そのうち越年には当地へ参るかも知れず、多分一応帰郷致すべきか。尤も、帰郷致すと申してもほんの暫時の考にて、直ちに前約の爲め是非暫時越智郡の方へまゐる積りに候。都

合によつては豫ての計画通り直ちに大阪へ上るべく、而して自己展覧会をやる考に候。就ては又御一臂の力を拜借致し度事も可有之、いづれ帰郷の節万様可申述候。

(大正十年七月十二日)

#### ○常型論

「常型論」は面白くない、脱線的でなければいけぬといふ点に御着眼は敬服。いかにも素人画といふものはそこに面白味があるので、兎角素人は型とか法とかに拘はれ、意表なものが出来難い。其処へゆくと素人は少しも拘束せられる所がなく、無頓着に揮舞ふ事が出来、従つて意表な面白いものが出来る訳である。

丁度我々が六朝風の書体の脱線的な面白い所をねらつて、工風して無理矢理にひねつてみても、容易にうまいものが出来ぬけれども、子供が書くは無意識的に自然に脱線的なうまいものが出来ると同様なわけで、素人画の面白さも畢竟その点にあるので、前回小生が常型論を以て律しようとしたのは大いに間違つた事でした。然るに、御面を部分的に観察すると、竹の幹や葉の描き方が大分違つたものになつてゐる。その点も脱線的であり度い。

要するに、どこまでも古人の型を無視して、自然の觀察から得た独特の表現が欲しいものです。

(大正十年七月十七日)

#### ○絵を習う心構え

御面追々御上達のやう御見受申す。

- (1) 用墨上に就いて一寸「悟り」を開けば絵の事は何でもなし。用紙は成るべく「かせんし」<sup>②</sup>を用ひられたし。墨色の雅味又格別なり。

(2) 紙に向つて先ず筆を下す時は、第一「位置」<sup>⑧</sup>といふことに就て注意を要す。局部局部が如何に巧妙に出来て居るとも、位置が悪き時は画として見るに足らず。位置が整うて居れば掛物としてもまずまず見苦しくなきものなり。

(3) 第三に「濃淡の配合」といふ事に注意され度し、濃淡については濃墨三分、淡墨七分、又は濃四分、淡六分位が調和最もよろしく、濃が勝つ時は画面きたならず、さわがしく、含蓄に乏しきものなるべし。

(4) 「賛」は絵の仕手に對して「脇役」の事故、文字は淡墨の方調和よろしく、別紙(略)甲図に於る如し。若し画が淡墨勝ちのものなる場合は濃墨たるべし。乙図に於るが如し。尤も、絵が狩野派の如き調子のものである場合は、濃淡いづれにても差支なからん。

(5) 「生氣ある絵」、活きた絵を描く秘訣なるものは他なし、可成物を書かぬこと、筆を省くことにありと悟るべし。

(大正十年七月十七日)

為山が描き霽月がそれに賛をした作品について、為山賛の俳画を日本一の賛と稱し、国宝物と自惚れている。為山の意気や壮大なるものがある。為山の画業も成熟し、描き慣れた画題も豊富になつて来た。霽月の孫誕生に当たり、その祝品として為山の色紙を依頼したが、直ちに左記の色紙三十枚を描き上げた。即ち、梅、枝垂桜、虎杖、柳に河骨、水草に金魚、枇杷、百合の花、柘榴、糸瓜、柿、葡萄、栗、黍、胡麻、芭蕉、棕櫚、果物、蔬菜、群畜等の中から選んで需めに応じた。

(平成元年十月例会、同二年二月例会における講演)

(松山子規会幹事)

(32ページよりつづく)

写生の絶唱・正岡子規(13) 岡田のり子 「笹」平成二、六  
虚子文学における写生文(1)(2) 梶中じゅん 「解釈学」平成二、

六、同二、一

虚子と友次郎と 小川勸 「かたばみ」平成二、七

虚子俳句評釈(106) 伊藤柏翠 「花鳥」平成二、六

虚子をめぐって(1)(3) 新馬立也 「五色」平成二、六〇八

正岡子規と河東可全 「春星」平成二、七

正岡子規と俳句分類 「海門」平成二、七

子規の家計と物価 村尾清一 「花鳥諷詠」平成二、七

『仰臥漫録』を読む(1)(2) 森玲子 「天狼」平成二、七〇八

正岡子規と俳句分類 和田克司 「海門」平成二、七

子規の絵「楽黙々の中に在り」 富岡計次 「風」平成二、七

俳句教養講座(97)子規・虚子 清崎敏郎 「若葉」平成二、七

虚子の小説(写生文)について(283) 前田登美 「裸子」平成元、

一一〇同二、七

俳句実作上達シリーズ(4)芭蕉と虚子 林翔他 「俳句」平成二、

七

同 波郷と虚子 石田勝彦 「俳句」平成二、七

記念講演「現代に生きる漱石」(要旨) 佐藤泰正 「地平」平

成二、七

文人は俳句に何を見たか 漱石と龍之介 脇本星浪 「俳句とエッセイ」平成二、八

# 極堂翁を偲ぶ(座談会)

司会 三井 瓢百

本田三嶺子・橘 里風・白田 三雅

二神 ヒサ・森 元四郎・足立 修平

塩崎 月穂

三井 十月というと極堂翁のご逝去の月でありますので、諸先生のお言葉を頂きながら、極堂翁とその所縁の人々を偲びたいと存じます。新居浜より三嶺子さんもお出席下さいましたので、翁と新居浜とはご関係の深かった所でございますから、まず三嶺子さんからお話を頂くことにします。

本田 昭和三十一年九月二十日は、我々の夢が七年ごしにかなった記念すべき日になりました。それは、柳原極堂先生を親しく新居浜の地にお迎えすることが出来た日であったからです。

洩れ承ったことはありませんが、先生が新聞に政治にご活躍のころ、義兄の岩崎一高先生と連れだつてしばしば東予地方へお出かけになり、土居町でも県議や町長をなさった尾崎陽堂先生宅へも立寄られたことがあるそうです。

新居浜に阿部里雪・青井嘉寿満のご両氏とともに降り立たれた極堂先生は大変お元気で、十四、五人のお迎えの人たち到大変ご満足の様子で、みんな両手を差しのべ、抱くような気持ちで思わず涙ぐみました。

早速昭和通りの合田一系邸へ直行、休憩の後庵の宮公園へ向かい足跡を印せられました。これはわれわれが念願の大句碑建立の想いがあつたからでした。

合田邸には二十日、二十一日と滞在されましたが、日夜沢山の知名の士が訪れて歓談されました。その間かねて邸内に建立されていた

分け往けば道はありけり芒原

極 堂

の句碑の除幕式が行われました。

二十二日には喜光地町の本田の家に移り、これ又多くの人々のご来訪を受け、かねて庭に建立されていた

手のひらにいたたく春の光かな 米寿 極 堂

の句碑が除幕されましたが、小さい庭に五十五名の人々が参集、ひと目極堂先生を見たいと念願していた人々が喜んでくれました。

午後は予定通り西条の遠藤節子邸へ発たれましたが、大勢の人々が手を振つて名残りを惜しみました。午後は里雪先生の司会で記念の祝賀句会が開かれ、夕方まで盛会でした。

先生にとって最後の大旅行になった今回の四泊五日の東新の旅は、里雪先生の名文で紙上に紹介されましたが、これについては裏話があります。七年も前から計画が始まり、何回も協議されましたが、ご高齢の先生には無理だという反対の意見もかなりあり、中心になつた人たちは大変心配しました。しかし、先生のご希望が強く、私

たちはそれに力を得て決行されることになりました。

新居浜で特に先生に尽くされた人々は次のとおりです。合田一系

・矢野樟坡・高橋真智子・横山輝女さんたちで、物心両面にわたり、逝去されるまで松山の子規庵へ通われたが、特に高橋真智子さんは、旧金沢藩士の亡き父上が極堂翁にそっくりだった由で、極堂翁とよく話され、お供した私の眼から見ると親子のようでした。

ご臨終の当日も私と二人で子規庵へまいり、最後となったお顔を拝し、心を残しつつ帰途につきました。壬生川駅通過の折車窓に袈裟がけの時雨が降って来ましたが、その刻がご臨終の時だったと後で聞きました。

新居浜と極堂先生とのつながりは、先生にとって大変な事業となつた子規庵建設に着手された八十三歳ごろからだつたと思います。

半折の揮毫に、一生懸命で、夏の最中など汗を一杯かかれて、正秋氏の奥さんマサ子さんに手伝いをさせて着替ええされていたのをお見受けすることもありました。

半折をせめて五百円ぐらいにという側近の人々の直言に対して、皆さんにご迷惑をお掛けするのだから、低く押さえてそれだけ余計に書けばよいと、お聞き入れにならなかったご心情に対して心をうたれました。私事ながら、私の友人知己等大変喜んでくれ、百口に余るほど協力してくれましたが、先生は新居浜での協力で感謝されていきました。

さきに記した新居浜へのご来遊は、文化人最高の方のご来遊と、心ある人々の間で今も語り草になっており、関係者の一人として鼻

の高いことでありましたが、今はこれらの人も多くは故人となられ、寂しくなりません。

最後に、新居浜におけるその他の極堂先生の句碑を紹介して終わりにいたします。

(1)市内庵の宮公園の大句碑(高さ九尺五寸、幅四尺五寸)

いつまでも忘れじ秋のこの旅を 九十老人 極堂

(2)市内一宮神社境内

樟千年神さびおわす宮の秋 九十翁 極堂

(3)市内庵の宮老人ホーム慈光園

老の春晴れがましくも九十一 九十一 極堂

これは元高橋真智子女史邸のもの寄付。

(4)市内沢津町池永千草邸

草の戸のこゝをおもてに松飾 極堂

(5)市内新田町神野豊山邸

手をかざす金子城址や秋曇 極堂

これらにさきの二基を加えた七基であります。

この稿を書いている最中、松山の子規記念博物館に於て、来たる四月より五月にかけて極堂特別展を計画中とかで、学芸員二人が小生方を訪ねられ下調査をして帰られました。大変うれしく心より喜んでおります。

三井 ありがとうございます。なつかしい里雪先生、物心共に限りなく翁に尽くされました高橋真智子先生、一系さん、輝女さんとなつかしい方のお話ばかりでした。いつも長く新居浜には滞在され、

「いつも三横子のうちを宿にして世話になるのよ」と申されています。

里風先生、物心共にいろいろと翁にお尽くし下さいました。思い出のお言葉を下さる。

橋 極堂先生の思い出はいろいろありますが、今日は、先生が半折や短冊などに俳句を書かれることにしほって、揮毫にまつわる話をするにします。

半折を書くから手伝いに来ておくれという連絡が私にあったり、わたしが訪庵したとき、丁度よいところへ来た。これから半折を書くかと思つたところじゃ、かまわなんだら手伝つておくれという調子で、半折の紙をひろげたり、短冊を差し出したりしてお手伝いをしたものです。そして、書き上がった半折や色紙へは、君は判のつきかたを知つてるから適当な印を押しおくれと言われるので、度々お手伝いをしました。

揮毫を頼みに来る人にはいろいろな型がありました。「何でもええから書いて下さい」というのは、どの句を書こうかと考えにやいかんで、何の句を書いてという方がええと言つておられました。

なかには、「ざつとでええから何の句でも書いて下さい」というがありました。これは、構えて書かなくても、楽な気持で、句は手あたり次第そこにあるものでええという、つまりいたわりの心ではあるが、こちらはそうはいかん、わしにとつては粗末なものを書かされて後世に恥を残すことになるのだから、まことにもつて失礼千萬なことだと言っていました。

一枚頼みに来る人には、たいがいあの有名というか代表句の「春風やふね伊予に寄りて道後の湯」を書いていました。また、「春風や」の句を指定して来る人もかなりおりました。これがいちばん書きなれとるからよいとも言っていました。

春夏秋冬の四季揃いの句を書いて下さいというのが時々ありましたが、その時はたいがい右の「春風や」の句につづいて、

大井川ふね箭のごとしほとゞぎす

秋の暮かどに風呂焚く山家かな

我影の崖に落ちけり冬の月

を書いていました。

この四季の句に新年の句を加えて五季揃いにしたいという人がありました。その時には「草の戸のこをおもてに松飾」を書いていました。でも、頼まれてか、気が向いてかは知りませんが、時には右の四季とは違う句を書くこともありました。だが、それは稀でした。

変つた句では、

河豚ふぐはいく人間の毒おそるべし

海鼠うしほ汝ふみつけるべき面もなし

があります。これは私の好きな句で、今の世の中にはこの句を見てやりたいようなおえら方が、あちこちにうようよしよるような気がします。

県民賞を受けられたとき私がお喜びに行つたら、

秋風の何処をくゞりて県民賞

と詠みました。この時先生は、これは誰が選んだんか知らんが、風がすき間をくぐりぬけたようなもので、人選をあやまつると、と言われたので尋ねたら、船田操さんや西村清雄さんのような偉い人が居られるのにと言われました。

文化賞をさづけられて

珍宝も役に立たざる老の春

木卯子

というのがありますが、これは、わたしと対談中にもとにあった紙へ書いて私に示されたもので、正式な作品としては書いてないのではないかと思います。

脚立たばとなげきし人の其人の

脚あと太し文の林に

まさゆき

のように和歌も書いていたし、雅号もこのように変ったのを書いてします。

手のひらにいたゞく春の光かな

は、道後公会堂での先生の米寿祝賀会るとき、先生の筆蹟で熨寸に印刷して出席者数百人に配ったものです。

近よれば聞きしほどなき柳かな

柳 極堂

と書かれましたが、「柳」の字の下があいているので、「原」の字がとんでいるのでは？と聞きますと、とんどのじゃない、これは句の中の「柳」は極堂のことじゃという意味じゃと言われたあとで大笑いをしました。

四季の句や、新年と合わせて五季の句を額に書かれたことはありますが、時には漢字の額を書いてくれというのが、これは縦書

きの俳句とちごて横書きになるので字並びがむつかしいと言っておられました。

先生は、八十二歳のときは正宗寺の子規堂に居りましたが、正岡家の旧菩提寺であった法龍寺の境内に宅地を得て子規庵を建て、子規の「粟の穂のこゝをたゞくこの墓を」の句碑を建立、更に子規庵の西に子規文庫を増築されました。この費用は全部、先生が半折を書いて一枚百五十円で頒布してつくられたものでした。先生と親しい人たちが、老齡の先生のご努力を見かねて、頒布料を倍額の三百円ぐらいに値上げするようにおすすめたのですが、先生は、今までの人が百五十円であったのに、これからの人が三百円というわけにゃいかんと言って頑として聞き入れてくれませんでした。これには、俳人極堂とは別に人間極堂の人柄をしみじみと思ひ知らされたのでした。

ある時訪庵していろいろ世間話などをしてしていると、そこにあつた紙に、

三十二年賀状に次の如く

書きたいものと思ひます。

九十一春も九九年で百歳ぞ

と書いてわたしに渡してくれました。

天はその九年を先生に与えられず、三十三年十月七日に不帰の客となられたのでした。

三井 ありがとうございました。翁の子規庵の生活ぶりや欲のない極堂精神、そして翁のご生涯の最終のことも知ることができました。

食糧の乏しいころ、「お米を里風が持って来てくれた」とよく申されてきました。

次に、白田先生、翁にまつわるお話を頂きたいのですが。

白田 極堂翁についてまず思い出されるのは、たしか昭和二十四年早春のこと、山上次郎氏と共に豊坂町の子規庵へお訪ねしたとき、何をお聞きしたのかすっかり忘れてしまいました、

草の戸のここをおもてに松飾

の半折を書いて下さって、わざわざ玄関までお見送り下さったこと  
であります。その後、「九十老人極堂」と書かれた絹本の懐紙を人  
から頂いて秘蔵しています。

また、昭和五十八年のこと、伊丹市に住んでおられる松川金波（  
松風会会員、極堂翁の下で編集長もされた人、のち兵庫御影に移  
住）の孫にあられる敏郎氏宅で古書画を拝見した折、手島石泉（  
南画家、松山住）の手になる「極堂翁市会立候補」のマクリ十余枚  
を一覧したことがあります。大正何年かは忘れましたが、それぞれ  
詞書きがあり、提灯をさげて極堂翁を中心に一群の人の行くさまや、  
演説をする姿など、壮年期の極堂翁をまざまざと見る思いがしまし  
た。松川さんには、資料としても大切なもの故、保存方をお願いし  
ていましたが、どうなりましたやら、その後は年始のあいさつのみ  
となっております。

また、三由孝太郎氏（淡紅氏長男）方で、子規堂の再建について  
熱誠あふれる長さ3〜4冊もある手紙を拝見したこともあり、翁の  
子規に寄せる想いの並々ならぬことを深く感じさせられました。

私を今日あらしめたのは、あるいはその一回のお目もじかも知れ  
ません。

三井 ありがとうございます。子規庵をお訪ねしたとき、私も松  
川金波さんのお話をよく聞かされていましてなつかしく存じました。  
また、石泉先生のこと、翁の市議立候補のことなどなつかしさを重  
ねました。子規堂の再建についての三、四冊の手紙のことを伺らの  
は初めてで、翁の熱心に頭が下がりました。

二神 子規ノ子規ノと叫び続けた柳原極堂さん、私は子規さんのお  
話を聞くととき、読むとき、いつもその後極堂さんのお姿が浮かん  
て来ます。

『草雲雀』とは極堂さんの句集の名です。清吟堂の吟詠会に「草  
雲雀」という名の会が生まれました。詩吟はこのごろとても盛んに  
なりまして、私方の公民館活動の中にも出来ました。入会を勧めら  
れましたが、「この年になって」、「入れ歯の私が出来ますかや」  
と思いついてもみませんでした。

それなのに、その私が、草雲雀の一言で「はい」と言ってしまう  
ました。音痴の私、声を出して歌ったことのない私、われながらど  
うしたのかと、返事をした後で思いました。

さあ、それからが大変なのでございます。声を出さねばなりませ  
ん。腹に力を入れて、口をもっと開いて、息を吸い込んで、そこは  
二段ゆすりですよと言われながら、なかなか上達しませんのに、  
やめないで続けて居るのでございます。

人様の前に立ちます。マイクをもっと口に近づけてと言われなが

ら吟じます。がたがた足が震えます。こんな気持ち、何年ぶりか、でもやめられないのでございます。

会場は、初めは会員個人のお家でお世話になって居りましたが、今は竹原の集会所です。地元の集会所でも詩吟会がありますのに、わざわざ汽車に乗って、毎週草雲雀会に出かけます。そのわけは、日本中どの会に行っても味わえないことがあるのでございます。

まず開会、信条、明治天皇御製の吟詠、その次のこれなのです。

極堂翁句集『草雲雀』の中の四季折々、毎月変った俳句二句を吟じるのでございます。十一月は、

しばらくは鹿とありくや奈良の町

萩を出てまた萩に入る小径かな

を吟したのでございます。涙がにじみます。この時、極堂さんのここに顔、お姿が浮かんで参ります。その嬉しさ、喜び。一人でなく皆さんと一緒に高らかに吟じますとき、私はこのひと時がある故に、やめられずちよちよと出かけ続けているのかなと思えます。今は、草雲雀の詩吟会に入会してよかったですと思つて居ります。よき師にもめぐり逢いました。そのほか数々のこと、深く感謝して居ります。

それにしても、柳原極堂さんを偲ぶとき、半折を沢山書いて建てられた子規庵がこわされ、無になつたことが残念です。私の目の黒い間に、愚陀仏庵のように復元されますことを、切に切に祈つて居るのでございます。

三井 ありがとうございます。清吟堂吟詠大会のプログラムを頂

き拝見しますと、余戸支部・道後支部などその所の名を支部名としたものが沢山ある中に、誰の御命名か知りませんが、「極堂句集草雲雀」と名付けた支部があり、本当に嬉しく思いました。いつまでもお元気で吟の道にお励み下さいませ。

子規庵再建は私も心から同感でございます。皆様のお力を下さいませ。ありがとうございます。

次に、森先生、極堂翁と桂木圭さんのお話を頂きたいのですが、森 桂木圭さんは、本名・陽、明治二十年十二月一日生れ、昭和四十八年十月十四日没、私の家の近く、三津須先町一六番地に住み、戦後宇和島市に移りました。

明治四十一年三月松山中学校卒業後早稲田大学文学部に在学中、山下汽船の社長秘書をつとめ、のち松山・宇和島では広く石油業に携る傍ら、新田学園理事を勤めました。

木圭さんは、よき時代の三津の風流人で、俳句・日本画・長唄を深くたしなみ、私の父・連翠より七歳年下であつたが、俳句その他で親戚並み以上の親交がありました。

温厚・円満で思慮深く、思いやり溢れた人で、私がいつか宇和島のお家を訪ねたときのこと、父の書いた軸物を私に示して、「これはここへ置いとくよりはあなたにあげた方がお父さんもお喜びになるでしょう」と言つて私に下さいました。父はそのずっと前に死去しており、私は父の書いた掛け軸を持っていませんでした。

軸には、「書きそめや曆の旧もなつかしく 連翠」とあり、木圭さんの好みて、黒地に白い文字で昔の曆の紙を使って表装してあり、

まことにすつきりしたもので、今も大切に、木圭さんの暖かい人柄を思っています。

極堂さんには懸命奉仕の念で接し、特に昭和二十年松山で空襲被災、新浜・洗心庵に御夫妻で移住された最も苦難の頃、木圭さんが、つねに暖かく、細かく援助された模様は、『柳原極堂書翰集』（昭和42年刊、極堂会）の七十通に及ぶ木圭さん宛書翰で明かです。

「―モン鰯御見当りの場合は、小生の為に御尽力賜りたく、量は多きを幸と致し候へども、亦、少量にても苦しからず、よきに御計らひ下されたく候―」（昭和20・11・25付）などの手紙がその間の事情を物語っています。

一間住まいの洗心庵の、炊事場の雨風よけ、居間より炊事場への通路、仮設的便所、ふとん入れ場、棚つり、窓明け、釣瓶修理等々、又、魚・石鱈・蕎麦ねり・米麦の心配から家賃の交渉まで、木圭さんは走りまわりました。

次男・雄三さん（中岡姓）から預っている木圭さんの句稿には、  
柳原極堂翁を新浜・洗心庵に訪ねて

翁と並び日向ぼっこや句の話

日障子を背にして句作や師の機嫌

一本の煙管探り合ふ火鉢かな

洗心庵に極翁と二人籠り居る時、内港の船にて餅搗く音聞ゆ

水に響き餅搗く音や泊り船

などの句があります。

その極堂氏が洗心庵から正室寺内子規堂に移り住む（昭和21年9

月）とて、

堂守りは子規の友なり頼祭忌

ともあります。子規・極堂への木圭さんの傾倒ぶりがしのばれます。三井 ありがとうございました。木圭さんのお話をこんなに詳細に頂けるとは思いもよらぬことでした。本当に深い深い御生涯であつたのです。翁との交わりも深く、翁のお世話が大変だったことでしょう。洗心庵から子規堂へのこと、色々のことを教えて頂きました。本当にありがとうございました。

足立先生、霽月翁との関係を示す色々のものが村上家には残っているとあります。何かお話し下さい。

足立 色々と書簡が残っていますが、「ほととぎす」草創の頃の、極堂さんより霽月への一通の手紙をご紹介します。

拜

御迷惑拝察仕候処、又々、ほととぎす併巻発送任候。御選抜奉願上候。混題句も添へあり、例の如く○印、◎印御分ち被下度、ほととぎす原稿何か急に御投与被下間敷や。東京より一つもまだ参らず、加之小生過日來の多忙にて今は氣力もつかれ居り、雑文一つ思ひつき不能、何卒願はしく存じ候。光風居七勝句、曾て御送り被下候も、外、（秋）新に出来居れば御追送奉願上候。此に六銭切手封入、御送稿被下度……

極堂

十九日

霽月 兄

三井 ありがとうございました。「ほととぎす」にまつわるお便り、

村上家にこそ残り居るものと、その貴重さに胸打たれました。六銭切手が時代を物語っていますね。

最後になりましたが、月穂先生、お父様と翁とは関係が随分深かったと承っております。何かお言葉を。

塩崎 極堂翁と父素月との関りは明治四十年頃からではなかったかと思われます。極堂翁が伊予日日新聞社の社長をしておられた頃で、素月は愛媛師範を卒業し県の学務課に勤務していた頃のことです。

その頃の素月の新聞切抜帖に、伊予日日紙への寄稿文が残っています。また、明治四十五年三月には、同紙の社友となるの文などがあります。当時は越智郡下朝倉尋常小学校長をしており、のち同郡農

商課長となっておりますが、大正四年には愛媛水力西条支社営業課長として転動しました。その頃もちろん伊予日日新聞社社友として側面から協力し、東予地方の情報記事などを同紙に寄稿しています。

また、大正十年頃、伊予日日新聞社の西条支局長を応募する件については、極堂翁から相談を受けております。(その件についての書簡は、子規会誌四三号に発表したのであります。) それによると、

「極堂翁の新聞記者探しの第一条件は「脚にて、頭の如きは第二義だ」と述べられ、新聞記者のあるべき姿を的確に把握しておられます。

そして、また翁は自作の「真裸になりて語らん皆人と」の句を示され、小生は何もかも露骨を生命と致候と書かれ、自らはすべてに潔白を旨としておられたことがかえります。

三井 ありがとうございます。新聞時代のことがよくわかりました。また、翁とのお交わりの深さを知りました。これまた随分お世

話になったことでしょう。お父様の御経歴もよく知ることが出来、御生涯を偲びました。

諸先生ありがとうございます。時間が過ぎましたので、このあたりで終りに致したいと思います。

(平成二年十月例会座談会)

## 編集の窓

### —— 論文 ——

是空の「大磯記と子規」 「春星」平成元、一、一  
正岡子規・あかばねの土筆摘み歌 浦野栄一 「狼狽」平成元、一、

二

「墨汁一滴」空白の一日 「春星」平成元、二、一

「墨汁一滴」と同日の俳句欄 「春星」平成元、三、一

「墨汁一滴」と中村不折 「春星」平成元、四、一

「不折山人写生帖」「不折山人十二支帖」 「春星」平成元、五、

一

常盤会寄宿舎創立と子規 「春星」平成元、六、一

常盤会寄宿舎と子規 「春星」平成元、七、一

子規と東海道線全通 「あじろ」平成元、七、二五

子規とつての神田と本郷 「春星」平成元、八、一

子規従軍の地と万朝報 「春星」平成元、九、一

『承露盤』 「春星」平成元、一〇、一

子規帰国時の啜血 「春星」平成元、一一、一

正岡子規と相馬虚吼 「春星」平成元、一二、一

正岡子規吟行の旅「西大寺と垂仁天皇御陵」 「近鉄文学散歩」平成元、一二、三

俳句と色(2)虚子俳句の色(承前) 岡田飛鳥子 「方円」平成元、一一

一一

虚子選「ホトトギス巻頭句集」放人編 飯塚考人 平成元、一二、平成二、一一

平成二、一一

子規と柿 本間香都男 「蘇鉄」平成元、一一

正岡子規のこと 草間時彦 「あさみ」平成元、一二

子規を読む 秋尾敏 「軸」平成元、二一平成二、六

子規秀句 宮坂静生 「鷹」平成元、二一平成二、一〇

子規とユーモア(2) 村尾清一 「花鳥風詠」平成元、二一平成二、二

成二、二

新海非風論 橋本寛之 阪南大学阪南論集、人文・自然科学編 平成元

成元

正岡子規のこと 草間時彦「あさみ」平成二、一

正岡子規の newly 評論文「和歌と俳句」 「俳星」平成二、一

子規の俳句分類「古正月」 「春星」平成二、一

子規と漱石の俳句 木間香都男 「蘇鉄」平成二、一

子規・談志瓜二つ説 内山草子 「つばき」平成二、一

人と文学正岡子規「歌よみに与ふる書」 松井利彦 「天狼」平成

二、一

子規からの手紙 加賀慶郎 「紺」平成二、一

漱石の俳句と正岡子規 上垣内栄子 「春嶺」平成二、一

虚子辞典稿1920 本井英 「惜春」平成二、一

虚子の写生に学ぶ 大橋敦子他 「俳句」平成二、一

虚子・人と作品43〜51 天野蘇鉄 「日輪」平成元、二一平成二、九

九

虚子の面影 赤堀五百里 「裸子」平成元、二一平成二、四〜一〇

虚子を学ぶ 後藤比奈夫 「飄詠」平成二、一

虚子年譜逸聞 高木石子 「未央」平成二、一

芭蕉と草田男の馬の句 磯貝碧蹄館 「握手」平成二、一

草田男の目・キリスト者の立場から 後藤軒太郎 「万緑」平成二、一

一

子規の「古正月」の分類 「春星」平成二、二

正岡子規の随筆の世界(「国文学解釈と鑑賞」特集正岡子規の世界) 平成二、二

平成二、二

子規縁りの医師達(1) 岩橋勲 「方円」平成二、二〜九

断想・虚子と碧梧桐 本間香都男 「蘇鉄」平成二、二

高浜虚子 石井保 「保」平成二、二

子孫に伝える詩・中村草田男全集3巻 石川園 「万緑」平成二、二

二

子規の俳句分類「梅」 「春星」平成二、三

正岡子規と海南新聞の松風会俳句 「大阪成蹊短大研究紀要」平成

二、三

子規とすまい(1)(2) 村尾清一 「花鳥諷詠」平成二、三、四

『墨汁一滴』 川崎展宏 「貂」平成二、三

子規再考(2)(7) 村田脩 「萩」平成二、三、七、八

立川淳一著「子規に俳句を学ぶ」に学ぶ 平柳青日子・乾鉄片子他

「群落」平成二、三

草田男先生に何う(57) 高橋せをち 「天瓜粉」平成二、三

虚子忌 藤田湘子 「坂」平成二、三

波郷・風三楼 平間真木子 「青山」平成二、三

私の「石田波郷ノート」より 関俊雄 「枋の芽」平成二、三

子規と雛祭りの俳句評 「春星」平成二、四

正岡子規の写生論 徳村二郎 「天狼」平成二、四

子規と漱石と松山鮎 松井利彦 「天狼」平成二、四

俳句百年・人間正岡子規 坪内稔典 「俳句」平成二、四

俳句百年・現代俳句に子規の残したるもの 山下一海 「俳句」平成二、四

二、四

俳句百年・正岡子規の花の一句 宮坂静生 「俳句」平成二、四

虚碧対立のきざし(4) 赤堀五百里 「裸子」平成二、四

俳句百年・人間高浜虚子 川崎展宏 「俳句」平成二、四

俳句百年・高浜虚子名句入門 上田五千石 「俳句」平成二、四

俳句百年・高浜虚子花の一句 青柳志解樹 「俳句」平成二、四

俳句百年・現代俳句に虚子の残したるもの 阿部完市 平成二、四

虚子・年尾・汀女と「ホトトギス」の人々 稻畑広太郎 「俳句

四季」平成二、四

現代俳句と高浜虚子 平井照敏 「俳句四季」平成二、四

虚子の小説と写生文 畠中じゅん 「俳句四季」平成二、四

不器男・波郷・白泉 細井啓司 「俳壇」平成二、四

現代秀句合評23石田波郷五句 寺井谷子・宮入聖他 「俳句とエ

ッセイ」平成二、四

虚子先生と語る・その人柄と温情 田中甫村 「かつらぎ」平成

二、四

子規と「龍眠」所収の書翰 「春星」平成二、五

子規とフランクリン 村尾清一 「花鳥諷詠」平成二、五

正岡子規の写生 小西昭夫 「糸瓜」平成二、五、六

虚子と茂吉・写生の位相 松林尚志 「暖流」平成二、五

特集選・虚子選の魅力 高田風人子 「俳壇」平成二、五

特集選・波郷選の魅力 村沢夏風 「俳壇」平成二、五

子規の金州北門城廓見聞 「春星」平成二、六

(22ページへつづく)

### 子規会報 四九号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 平成三年七月十九日

発行所 松山市末広町正宗寺内

郵便振替 徳島二一八六八

青柳志解樹 柳堂 松山市東長戸二丁目一三九

カードで贈る、三越のギフト。  
**「三越ゆめカード」**

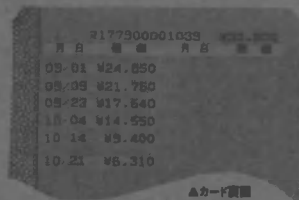
■1階商品券売場



商品券の機能がさらに便利になりました。ギフトにはもちろん、ご自身のお買物にもご利用いただけます。三越本・支店及びグループ各店(千葉・名古屋・金沢・新潟・鹿児島・沖縄の各三越)ギフトショップなどでご利用になれます。

- お祝い、お礼などのギフトにはもちろん、ご自身のお買物にも最適です。
- 贈り物として使われる場合には、素敵なギフトパッケージをご用意しました。
- カードの種類も3千円、5千円(4種類)1万円、2万円、3万円、5万円、10万円の10種類。多彩な顔ぶれです。
- キャッシュレス時代にふさわしく、お買物のたびに小銭のわずらわしさがありません。
- お買物の都度、40回までカードの裏面にご利用月日と残額が表示されます。

※詳しくは1階商品券売場へ  
お問い合わせくださいませ。



▲カード裏面



**MITSUKOSHI**

松山 〒790 松山市一番町3-1-1  
 TEL/0899-45-3111(大代表)

松山を代表する

# 銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町商店街

## 巴堂本舗

TEL 0899 (41) 3452

会議・御会食をホテル春日園へ  
四季の移り変わりを楽しめる露天  
岩風呂で一句ひねってみませんか。

政府登録国際観光旅館

# 春日園

ホテル

〒790 松山市道後鷺谷町3-1  
☎ (0899) 41-9156



お食事処…かすが…

石畳、格子戸、木の香もかぐわしく  
くつろぎのときに情緒ひとしお

第6回愛媛出版文化賞受賞

『愛媛子どものための伝記』 全20巻

A5版 上製 各巻1,030円 発売中

自費出版

お気軽にご相談下さい。  
編集からお伝えさせていただきます。

印刷 & 出版 青葉 図書

〒790 松山市小栗6丁目3-23 ☎ (0899) 43-1165

¥300